Ⅰ　研究主題　　自ら心と体を動かし、たくましく生活する幼児の育成　(3 年次)
～「思いの伝え合い」を支える教師の援助のあり方を探る～

出雲市立四絡幼稚園

Ⅱ　主題設定にあたって

1　本園の実態

（1）地域・家庭の実態

・四絡地区は出雲市の中央部に位置し、近年になり商業施設や住宅が増え、都市化が進んだ。そのため、自然環境が少なくなり、幼児が安心して遊ぶことができる場は限定的である。

・園全体の約９割が核家族である。県外からの転居者や、外国にルーツのある家庭も増えたことにより、地域と関わる機会に乏しい、気軽に相談できる人が少ないなど、子育てに対する悩みを抱えている保護者も増えている。

（2）幼児の実態

・本園の園児数は、69 名（３学級編制）の中規模園であり、いろいろな幼児の思いや考えに触れられる環境にある。

・幼児は素直で人懐こく、友達や異年齢児、教師との触れ合いや会話を楽しんだり、相手に対して優しく声を掛けたりすることができる。

・様々な活動に興味や関心をもち、「おもしろそう」「やってみよう」と関わる姿が見られるものの、少し難しいことに直面した時には、課題を乗り越えていこうとする力に乏しい。

・失敗や間違えることを気にし、思っていることを素直に表現しにくかったり、自分の考えを言えず、友達に合わせたりする姿も見られる。

2　主題設定の理由

近年の情報化や新型コロナウイルス感染症の流行による生活様式の変化などに伴い、社会が大きく変動し、幼児を取り巻く環境や幼児の育ちにも大きな影響をもたらしている。家庭で過ごす機会が増加したことにより、直接体験や本物体験の機会が減り、メディアと触れ合う時間は増加傾向にある。本園の幼児の実態からは、自分で課題を解決していこうとする力、自分の思いを表現していく力に乏しさが見られた。そこで、研究主題を「自ら心と体を動かし、たくましく生活する幼児の育成」とし、幼児が興味や関心をもった「ひと・もの・こと」と関わる中で、自分の思いや考えを表したり、諦めずにやりとげようとしたりし、遊びや生活に意欲的に取り組む姿を大切にしたいと考えた。

幼児が意欲的に遊びや生活に取り組むには、まずは自ら心と体を動かし主体的に環境に関わり、思いを伝え合うことが大切であると考えた。幼児は自分の思いを素直に表したり、友達の考えに触れたりしながら遊ぶことで、自分の考えに自信をもったり、自分と違う考えに気付いたりし、友達と一緒に遊びを進めていく喜びや充実感を味わう。それを積み重ねることで、自分たちで考えたり、課題を乗り越えたりし、主体的に遊びや生活を作っていく姿につながると考える。そのためには、一人一人の表現を丁寧に受け止めたり、認めたりし、さらには相手の考えに気付かせたり、相手の思いも受け入れたりできるように支え、友達と一緒に遊びを進めていく面白さを味わわせることが大切である。

そこで今年度は、「思いの伝え合い」に視点をあて、幼児一人一人の思いや育ちを捉えた教師の援助のあり方を探っていくこととした。

【たくましく生活する幼児とは】
・身近な環境に自分から関わろうとする
・自分で遊びを見つけ、考え工夫する
・諦めずに繰り返し取り組む
・互いの思いを伝え合いながら遊びや生活を進める
・遊びや生活に見通しをもって、意欲的に取り組む

【伝え合いとは】
・安心して自分の思いを表情やしぐさで表す　　3歳
・言葉のやりとりを楽しむ
・自分の思いや考えを伝える　　4歳
・友達の話に興味をもつ
・自分の思いをことばで伝える
・相手の考えに気付く　　5歳
・友達の思いや考えを聞く
・自分の思いを伝えたり、相手の考えも受け入れたりする
就学

Ⅲ　研究の目標

自ら心と体を動かし、たくましく生活する幼児を育てるために、「思いの伝え合い」に視点をあてた教師の援助について、保育実践を通して探る。

Ⅳ　研究の仮説

①幼児の心情や経験を読み取り、一人一人に寄り添った援助を工夫すれば、幼児は安心して自分の思いを表したり、自分の力を発揮したりするであろう。

②幼児が思いを伝え合いながら生き生きと遊ぶ姿を支えていけば、自ら考え行動し、たくましく生活する幼児の姿につながるであろう。

Ⅴ　研究の内容と方法

内容	○幼児の興味や関心に基づく遊びの過程での心情や経験を読み取る。 ○幼児が思いを伝え合って遊ぶために、幼児自ら心を動かすような多様な体験の工夫や教師の援助の在り方を探る。
方法	①　つながるトーク（遊びの一場面を捉えた写真を用いて行う教師間での話し合い）を通して幼児の心情や経験を多面的に読み取り、援助の在り方について学び合う。 ・幼児の思いや経験している内容を読み取り、幼児理解を深める。 ・読み取った内容を基に、幼児が安心して思いを表せるような援助の在り方を探る。 ②幼児の心が動かされるような「ひと・もの・こと」との関わりや活動を工夫する。 ・心が揺さぶられるような体験の工夫（直接体験・園内や地域の自然・地域の文化・人との関わり） ・年齢に応じた話し合いのもち方の工夫 ③家庭や地域と連携を図り、保護者と一緒に幼児の育ちを支えていくための活動を展開する。

Ⅵ　研究計画

１年次（令和３年度）	２年次（令和４年度）	３年次（令和５年度）	４年次（令和６年度）
○幼児の実態把握 ○研究主題の立案と実践 ○実践事例により共通理解を図る ○教育課程の見直し ○１年次のまとめ	○研究主題及び研究構想の再検討 ○保育実践の分析と考察 ○２年次のまとめ	○研究内容と方法の具体化 ○保育実践の分析と考察 ○３年次のまとめ	○研究内容と方法の再検討 ○保育実践の分析と考察 ○４年次のまとめ

Ⅶ　実践事例

事例１　　方法①

『幼児の心情や経験を読み取る「つながるトーク」の取組について』

《取り組み》

遊びの中での一枚の写真をもとに、子供の「心情」「経験している内容」「今後の保育の構想」などを付箋に書き込み、学級の職員で話し合いを行う。学級内で話し合いを行った後、各学年の担任、園長が集まり、さらに話し合いを深めていく。話し合った内容を学級に戻し、フィードバックを行う。

《この場面を取り上げた理由》

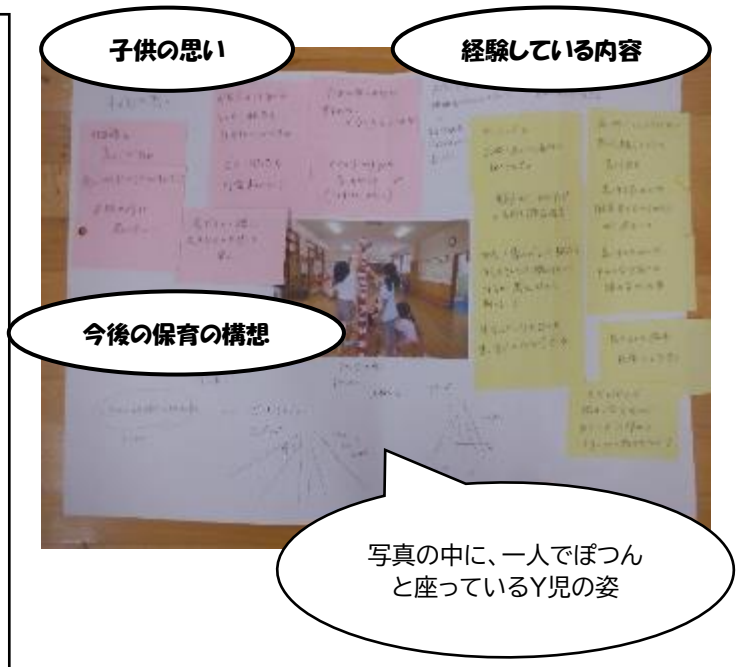
親子活動「だいすき♡よつがねウォーク」や園外保育の体験から、年長ばら組の中で「よつがねだいすきまち」の遊びが始まり、四絡の街で見つけたものを作ったり、遊びに取り入れたりしていた。放送塔に興味をもった子供たちは、牛乳パックを使って放送塔を作り始めた。しかし、自分なりに積み上げては倒れることが何度も続き、遊びが停滞し始めた。教師自身もこの遊びの支え方について悩んでいたため、つながるトークで取り上げ、話し合いを深めていくことにした。

《学級内の職員間での話し合い》

【子供の思い】
・本物のように放送塔を高くしたい
・倒れないようにするにはどうしたらいいかな？
・ぐらぐらしているからガムテープを貼り直したらどうかな？
・紐で固定したらいいかな？　　など

【経験している内容】
・高く積み上げるための方法を自分なりに考える
・友達と話し合いながら遊びを進めようとする
・友達と役割分担しながら遊ぶ　　など

【今後の保育の構想】
・放送塔を支える素材の工夫
・作った後の遊び方を考える
（転がしコース、トンネルなど）



年長５歳児「放送塔を作ろう」の
つながるトークより

《学年担任同士での話し合い》

遊んでいる子供たちの中に、Ｙ児が座り込んでいる姿が気になる。Ｙ児は何に興味関心をもっているのか、またＹ児のやりたいことは何かなど、心情を読み取っていく必要がある。

Ｙ児はなぜ一緒に作らず、座り込んでいるのかについて話し合ったところ、欠席が続き、共通の体験があまりできていないことが関係しているのではないかと考えた。Ｙ児は、なかなか遊べずにいるが放送塔の場から離れないことから、放送塔の遊びには興味をもっていると感じる。そこで、Ｙ児も友達と同じ場で楽しめるように、改めて放送塔を見に行くことにした。

《その後の保育》

放送塔で遊ぶ友達とＹ児と一緒に、放送塔を見に行くことにした。作った放送塔がなぜ壊れるのか、困っている時期だったため、みんなで見に行くと「ワイヤーは５本ついてるね」「近くで見ると、放送塔ってこんなに太かったんだ」など、目的をもって出かけていることが分かった。友達と放送塔を見た帰り、Ｙ児は友達に「良いものができそうだね」と声を掛け、園に帰ると早速作り始める姿が見られた。

【考察】

学級内での話し合いでは、集団の姿ばかりを捉えていた。そのため、学級内の話し合いだけではＹ児の心情を深く読み取ることができなかった。他学年の担任と「つながるトーク」でＹ児の心情について改めて話し合うことで、Ｙ児の姿に寄り添うだけでなく、多面的に捉えて幼児理解を深めることができた。Ｙ児の話し合いから、集団の支えも必要であるが、まずは一人一人の幼児理解が大切であることが再確認できた。

また、「つながるトーク」では、各学年の担任が一緒に話し合うことで、発達について共通理解ができ、今後必要な経験や援助について、共に学び合うことができると感じた。幼児の心情を読み取り、援助の仕方や保育の構想について考え実践することが、幼児が安心して自分の思いを表したり、自分の力を発揮したりする姿につながった。

課題として、行事や職員の勤務体制等により定期的な「つながるトーク」の実施が難しいことがあった。明日の保育に繋げるためにも、話し合う内容に時間が空かないようにする必要があった。いつでも誰でも書き込めるように「つながるトーク」のシートを用意しておくなどの工夫をしながら、今後も学級内、各学年担任同士の話し合いを深め、幼児の心情や経験を探りながら幼児が安心して自分の思いや力を発揮できるような援助に努めていきたい。

事例２　年少たんぽぽ組（6 月中旬～7 月上旬）　方法②

「心が揺さぶられるような体験を捉え、幼児が自分の思いをしぐさや言葉で表現するための援助について」

幼児の実態（5 月～6 月）

○集団生活の経験がある幼児がおり、学級全体が比較的安定した気持ちで過ごす姿が見られた。一方で、自分の気持ちを表しにくい幼児や、教師との一対一の関わりを強く求める幼児の姿も見られた。

○園で飼育しているウサギやザリガニなどの小動物に餌やりをしたり、ダンゴムシやバッタなどの虫を捕まえたりするなどの姿が見られ、生き物に対する興味や関心が高い幼児が多くいた。また、観察して気付いたことを教師に言葉やしぐさで伝えようとする姿も見られた。

教師の願い

○身近な生き物と関わる体験を重ね、心が揺さぶられるような体験をすることで、自らの心と体を動かして遊んでほしい。

○好きな遊びやことを見つけ、繰り返し楽しんだり、その遊びやことを通して友達と触れ合って遊ぶ楽しさを感じたりしてほしい。

	○子供の姿	＊環境の構成と援助 ◇教師の思い、読み取り
6 月中旬 6 月 12 日	**保育室近くの屋根の隙間でイソヒヨドリのヒナが生まれる** ○鳥の存在に気付き、じっと見る子供もいたが、巣があることには気付いていない。 ○朝の会の時に、窓の外に鳥が来ていることに気付く。 A 児：先生、見て見て！鳥さんがいるよ！ ○朝の会を中断して、全員でじっと窓の外を観察する。 B 児：なにか食べてるよ！ A 児：お腹が減ってるんじゃない？ B 児：あっちに飛んだ！ （巣の方向へ飛んでいく） T：みんな、静かにしてごらん、何か聞こえるよ。 A 児：なんか、ピーピーピーっていってる！ B 児：赤ちゃんがいるんじゃない？ C 児：こっちから聞こえるよ！	＊生き物との触れ合いを大切にしたり、園庭に来る鳥に興味が向くような声掛けをしたりする。 ◇自分たちで巣の存在に気付き、感動体験をしてほしい。 ＊朝の会を中断し、みんなで観察することで、学級全体の興味や関心につながるようにする。 ＊鳴き声に気付いていない様子であったので、みんなで聞くことができるよう声掛けをする。 ◇鳴き声を聞いて、過去の体験やイメージからヒナがいることに気付いた。
6 月 14 日	○その後、何度か鳥が屋根の隙間に入っていく場面に遭遇する。（ヒナに餌やりをしているところを観察しようとするとすぐに逃げてしまう。）	◇C 児は遊びの場面でなかなか自分の思いが表しにくく、好きな遊びが見つけにくい様子が見られる。イソヒヨドリに興味をもつことで、好きなものを見つけたり、見つけたことを表現したりしてほしい。
6 月 15 日	**「わ～！入った！」みんなで巣を観察しよう** ○テラスでじっと待ち、親鳥が餌をやる瞬間を観察しようとするが、なかなか親鳥が巣に入らない。 B 児：みんながいるから、怖いのかな？ A 児：しーだよ！ T：みんな石に変身して、動かないで待っていよう！ ○親鳥が巣に入り、ヒナに餌やりする様子を観察する。 C 児：わ～！入った！！ D 児：赤ちゃんが見えた！ B 児：虫をあげとった！ まだかな？なかなか入らないね	◇実際にヒナに餌やりをしているところを見れば、更に興味や関心をもったり、自分たちの遊びにもつながったりするのではないか。 ＊テラスでじっくりと観察する時間を保障する。 ◇自分たちの興味のあること、すぐ目の前で起こっている事象であるため、30 分近く観察していたが、最後まで集中して観察することができた。
6 月 19 日	**そーっと巣の中を見てみよう！** ○脚立の上に登って、巣の中を直接観察する。 C 児：髪の毛みたい！ふわふわしてる！ D 児：口開けてる！！ B 児：ご飯頂戴！頂戴って言ってるんじゃない？ T：本当だね！みんなと同じでモリモリ食べてるね！ ドキドキ… 赤ちゃんいるかな？	◇“巣に入っていくところが見たい”という思いをもって見ていたので、実際に見た時の感動も大きい。 ＊教師が撮った写真や、図鑑を学級に掲示し、子供が自由に見れるようにする。 ＊教師の撮った写真を見て、「私も見たい」という子供の声に、安全面に配慮しながら観察できるよう支える。また、子供の素直な思いに共感する。

6月下旬	**パパ鳥とママ鳥だね！** ○毎日のように観察を続けていると、親鳥の体の色が 2 色あることに気付く。学級の表示を見ながら、オスとメスがいることを教師と一緒に確認する。 B 児：お父さんとお母さんだったのか！ A 児：パパ鳥とママ鳥だね！ ○学級全体にパパ鳥、ママ鳥が浸透し、「先生、パパ鳥が来たよ！」「パパ鳥が虫を口にくわえてるよ」など言う。 ○学級全体の遊びが“たんぽぽ公園”という名前に決まり、たんぽぽ公園で遊ぶ仲間たちのお面作りをする。 T：みんなたんぽぽ公園で何になりたい？ D 児：ママ鳥！　B 児：パパ鳥！ ○教師と一緒にヒナの人形作りをする。 C 児：たくさんふわふさせたい。 D 児：もっと髪の毛を着けたい。 	◇ヒナの様子を観察し、ヒナの動きや体形の発見をしている。発見したことから更に、イメージを広げている。 ◇巣に入っていく親鳥の体色の違いに気付き、不思議に思っている。 ＊子供と一緒に表示した図鑑を確認し、子供の気付きが次の発見や面白さにつながるよう支える。 ＊“パパ鳥”という子供のワードを学級全体に知らせ、親しみの気持ちがもてるようにする。 ◇子供の心の中に、イソヒヨドリが浸透しており、学級全体で共通の体験となったことで、自分たちの遊びにも自然と出てきている。
6月２６日	**ヒナの巣立ちに気付く** ○月曜日の朝に、ヒナ鳥の声が聞こえないことに気付く。観察すると、巣の下にまだ一羽残っており、巣立っている様子を見守る。 T：なんか、ヒナがいなくなって寂しね。 D 児：え！寂しくないよ！だってたんぽぽにもいるじゃん！ （ヒナの人形を指さしながら）	◇親鳥になりきって遊び、ヒナ鳥の世話をして遊ぶことで、より親しみの気持ちをもったり、遊びを通して友達と触れ合って遊ぶ楽しさを感じたりしてほしい。
6月下旬	**たんぽぽ公園でヒナと一緒に遊ぼう！** ○たんぽぽ公園の遊びで、ヒナの人形を抱っこ紐で抱っこやおんぶをしたり、ヒナの人形にお店屋さんで買ったおにぎりやジュースを食べさせたり、飲ませたりして遊ぶ。 C 児：赤ちゃん用のご飯ください。 D 児：ちょっと待ってくださいね。今作ります！ 運動コースの遊びや、お買い物などいろいろな遊びのコーナーにおんぶして連れていく。 C児は登園後友達と一緒に、自分たちで準備してヒナの人形を可愛がっている。	＊抱っこしたりおんぶしたりすることができるような大きさの人形の土台を制作しておく。 ◇ヒナの人形が子供の中で、大切な存在になっている。ヒナのお世話をしたり、抱っこをしたりすることで、温もりや優しい気持ちを感じ、自分たちの安心につながっており、安定した気持ちで遊ぶことができている。 ＊抱っこ紐を用意し、自由にお世話ができるようにする。教師も一緒にご飯を食べさせたり、飲み物を食べさせたりして楽しさを共有する。 ◇遊びの中で自分の思いを表しにくい様子だった C 児が、イソヒヨドリに思いを寄せ、ヒナの人形を可愛がることで、ごっこ遊びの世界に夢中になり、友達とのやりとりを楽しんで遊んでいる。

【考察】

イソヒヨドリの子育て（雛鳥の可愛さ、鳴き声の面白さ、命の尊さなど）を直接的に感じてほしいという願いをもった。偶発的に起こった身近な事象を大切にし、それを見逃さず保育に取り込むように環境構成を行った。親鳥が巣の中に出入りする様子や、生まれた雛を観察したりしたことが幼児の心を揺さぶり、嬉しさや喜びといった感動体験につながった。その感動を「ねえ、聞いて！」「見て見て！」と教師や友達に思わず伝えたくなり、自分なりの思いを表情やしぐさ、言葉で表そうとする姿が多く見られるようになったと考える。

３歳児の一学期は、入園して間もないことから不安が多い時期である。イソヒヨドリの赤ちゃんを作って優しく関わったり、お世話をしたりし、家庭の温もりや優しさを感じながら遊ぶことで心の安定につながったと考える。また、教師に自分なりの思いを出し、それを受け止めてもらったり、認めてもらったりしたことが、安心して自分を表現できる姿につながったと考える。３歳児にとっては、思いの伝え合いの基盤となる心の安定や一人一人が安心して自分の思いを伝えたくなるような教師や友達との関係作りが大切であると感じた。

事例３　年中すみれ組（５月上旬～６月上旬）　方法②

「“水ジェットコースター”の遊びから思いの伝え合いを支えるための援助について」

幼児の実態

・年少組から継続したクラスであり、親しく打ち解けた雰囲気ではあるが、仲間関係が固定化している。
・周りの環境を取り入れながら遊ぼうとする幼児が多い。園庭の自然や地域のことなどにも興味をもっている。
・自分なりの思いを表現しながら遊ぶ姿が見られる。しかし、教師や友達に対して自分の思いや考えを言葉で表して遊ぶことはまだ難しく、思いの相違があったり、一緒にしていた遊びが継続しにくかったりする姿も見られる。

教師の願い

・園庭で、砂・土・水や草花などの自然に触れて遊ぶ楽しさを感じたり、様々な発見や気付きから知的好奇心を高めたりしてほしい。
・気の合う友達だけではなく、学級のいろいろな友達と関わりながら刺激を受け、その子なりの考えや経験を広げてほしい。
・身近にある自然や四絡地域に興味や関心をもち、遊びに取り入れてほしい。

Ｅ児について…自分の思いを素直に表し行動に移すことができるが、失敗したり、自分の思い通りにいかないことがあったりすると切り替えが難しい。相手の思いや考えを聞いたり、それに気付いたりする姿はあまり見られない。

Ｆ児・Ｇ児について…双子の兄弟であり、互いに支え合って生活している。友達と一緒だったり、何かきっかけがあったりすると遊びを楽しむことができるが、自分たちから遊び出すことは少ない。しかし、一度遊び出すと、難しいことを一緒に考えたり、やってみようとしたりする気持ちをもっている。

教師の願い

・自分なりの遊び方ややり方を表して遊ぶことで、自分の考えに自信をもってほしい。
・友達と関わりながら遊ぶ中で、相手の思いや考えに気付き、それを真似たり、自分とは別のやり方で挑戦してみたりし、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わってほしい。

子供の姿

＊環境の構成と援助

◇教師の思い、読み取り

5/9　ずっと遠くまで水を流そう！

年長児が樋で遊ぶ姿を見て、自分たちも樋を並べ、築山の上からコース作りを始める。

Ｅ児：（一人で黙々と樋を運び友達の樋とつなげていく）
Ｆ児：だんだん長くなった
Ｇ児：こうすると水がこぼれない（樋の重ね方を工夫している）

Ｅ児：（樋の重ね方は気にせず、どんどんつなげていく）
Ｇ児：もう！こうすると（水が）こぼれるよ。（Ｅ児に向かって言う）
Ｆ児：逆にしないとこぼれるよね…。（重ね方を変える）
Ｅ児：（友達の発言は気にせず、長くつなげる）

周りの友達は、Ｅ・Ｆ・Ｇ児が並べていった樋に水を流し、水が流れる様子を見ている。

Ｇ児：水がゴールまでいかない。何で？（こぼれているところを直す）
みんなで一緒に流してみたら、最後まで行くかな？
Ｆ児：ここまでは斜めだから速く流れるね～。
Ｅ児：ここにつなげよう（重なり方や傾斜は気にせずつなげ続ける）

＊園庭の使い方を担任同士で話し合い、全学年の遊びや友達同士の遊びが見えるような場の取り方を工夫する。
＊一人でも扱いやすいもの（バケツ、大きなペットボトル、短い樋、樋用の台など）や、協力して運ぶ必要があるもの（ビールケース、長い樋など）を準備する。自分のしたいことを実現させたり、友達と少し協力して取り組んだりするような環境の設定をする。

◇年長児に刺激を受け、樋を使った遊びを始めた。ほとんどの子供がコースを長くすることを楽しんでいる。樋の使い方や並べ方、傾斜などによって水の流れが変わることなどにはまだ興味や関心をもってない。
◇Ｅ児は、樋を数多くつなげ、コースを長くすると、水が遠くまで行くと考えているようである。水が流れていないと気付いたＦ児の言葉には無反応であった。友達の言葉に気付かせた方がよいとも考えたが、Ｅ児の楽しさは別のところにあったため、今回は声を掛けなかった。
◇Ｆ・Ｇ児は、樋に何度も水を流すうちに、場所によっては水の勢いに強弱があること、樋の重ね方によって水がこぼれてしまうこと、水の量によって水が進む速度に差があることなどに気付き始め、Ｅ児が重ねた樋を直しながら楽しんでいる。

「いいねタイム」の実施

・「いいねタイム」（話し合い）を行い、気付いたことを学級の友達に知らせる。

遊びのマップ掲示

・「すみれ森」の遊びの過程の掲示板を見合う。

＊「いいねタイム」でＥ・Ｆ児の気付きを学級全体で共有する機会をもつ。

＊水ジェットコースターの遊びでの気付きについて、写真や絵、文字で記載し、遊びの場を見える化する。

5/15　坂道だと水が遠くまで進むんだ～

「平らなところでは水が流れないよね」と、同じ場で遊ぶ友達同士で話している。E 児が急に何か思いついたように走っていく。

E 児:これ持ってきたよー！
　T：E 君、台を持って来たね！
　　それを使うと、水が流れると思ったんだね！
E 児:うん。斜めになる！
　　（樋の台を運んで道を作り、築山の頂上で角度を付ける）
F 児: いいね！ありがとう。
G 児:よーし、流してみよう！
H 児が水を流す。
全員：流れたー！！

F 児: でも、ゆっくりだね。
　　じゃあ、こうする？
　　（築山の頂上ではなく、傾斜部分に台をずらす。）

H児が水を流す。
G 児: いいね！今度は速くなった。
　T：何でスピードが速くなったのかな？
E 児:Eくん（自分）がたくさん持ってきたから！
　T：どんなふうにした？
G 児:坂道になったからじゃない？
E 児:うん、坂道になったからだ。
　T：後でみんなに教えてあげよう！坂道のことと、スピードのこと！
E 児:うん、Eくんがこうしたから！
　T：E くんが流れやすいように台を運んでくれたし、ここで遊んだみんなで坂道を考えたもんね！

＊遊び始める前に、前回の「いいねタイム」で話したこと（水をたくさん流すと遠くまでいく、平らなところでは水が進まない）を再度伝え、今日のめあてがもてるようにする。

◇E 児は、遊ぶ前に友達の話を聞き、樋を斜めにするには台が必要だと思いつき、持ってきた。友達にも「ありがとう」と声を掛けてもらい、満足そうな様子が見られた。
◇初めは築山頂上の平らな場所に台を並べ、傾斜を作ったが、それほど角度はつかない。

＊E 児が友達の考えを聞いて行動した姿を言葉にして他の友達に知らせたり、E 児に対して友達が優しい声を掛けている姿に共感したりし、互いの思いや考えが伝わるように支える。

◇E 児が台を置いたことで、少し傾斜がついた。F・G 児は、より傾斜がつくようにと考え始め、築山の斜面に台を移動させるとよいことに気付く。水を流して試してみると、傾斜がきつくなったため、水がより速く流れた。

＊流れるスピードに着目して樋の置き方を工夫したり、水を流して確かめたりしながら遊びを実現させようとした姿を捉え、教師がその気付きを言葉にして返していく。

◇はじめに E 児が台を準備していたため、F・G 児は傾斜の角度をきつくすることに気付き、水の流れがより速くなった。

＊子供たちの気付きを学級の友達とも共有できるよう、「いいねタイム」で取り上げる。

5/17　カーブするコース、水しぶきが面白い！

坂道（傾斜の角度を大きくする）にすると、水の流れが速くなったため、前回と同じように樋を並べ始める。
樋が長くなると、E 児は樋を直角につなげ始める。

G 児：カーブした！
E 児：うん、そう。
H 児：（水を）流していい？
E 児：いいよ！
H 児：あー、こぼれた。
　　（みんなで笑い合う）

E 児：ここ（角）が動かんようにしないと。
　　（みんなで押さえる）
E 児：いいよ！（H 児が水を流す）
F 児：あれ？こぼれるね。バケツ貸して！（バケツで水を受ける）
E 児：たまってるよ。
G 児：でも、カーブしない…。

　T：何か困ってる？
E 児:カーブしてね、水がこぼれる。
　　みんなで押さえてるのに…。
　T：そうだね。困ったね。困ったことがあったら、みんなに聞いてみるとよかったね！
G 児:じゃあ、「いいねタイム」でみんなに聞いてみよう。

◇E 児は同じ場で遊ぶ友達に自分の思いを伝えないまま、行動に移すことが多いため、後になって周りの友達が E 児の思いに気付いていく。「カーブさせてみよう」と、E 児が遊ぶ姿を見て、その考えを周りの友達が自然に受け入れ、興味をもち、一緒に楽しんでいた。

◇傾斜のついたコースから水が速く流れたため、カーブしたコースから偶然に水が噴水のように漏れたことを面白がっていた。予測はしていない発見や気付きを楽しんでいる。

◇F・G 児は、E 児の遊び方に刺激され、自分たちの考え方で遊び始めた。水をカーブさせることには失敗したが、E 児の考えで遊びにより面白さを感じ、一緒に笑い合ったことが、遊びの実現に向かう原動力になっているのではないか。

◇その反面、E 児の遊び方で楽しんではいたものの、F・G 児は本当にこの遊びがしたかったのか、思いのズレはないのかと考えた。

＊コースと一緒に水もカーブするようにするためにはどうしたらよいのかという困り感を学級全体で考える時間を保障する。

＊それぞれの子供たちが自分なりの思いを出して遊ぶことができているのか、「いいねタイム」で話を聞き、遊びのイメージを共有する。

6/5　くぐる道作りをしよう！　大好き♡よつがねウォーク後の遊び

前回の遊び後の「いいねタイム」で、カーブするコースを作るために、“（樋だけではなく）他の道具を使ってみたらいい”と友達に教えてもらった。

F児：うーん、今日は（コース）どうする？
G児：どうしようかなぁ…。
E児：カーブする？
F児：カーブする！
E児：（樋を）取りに行ってくる！
F児：そうしよう！
3人で樋や台などを運び、並べていく。道具を探すうちに、E児が樋用のジョイントを見つけ、カーブに使うことを思いつく。

F児：これ（ジョイント）を付けても、（ジョイントが）短いから少ししかカーブしないよ。すぐに（水が）止まっちゃう。
E児：水を流してみよう！
G児：でも、（水が）こっちまでいかないもん。
F児:（しばらく考えて）じゃあ、これ（樋）をつなげて、くぐる道路（バイパス）みたいにする？
E児：そんなの難しいもん。

F児・G児は、E児の思いを聞きながらも、くぐる道を作り始めるがなかなかうまくいかない。
E児はその様子をじっと見ている。
F児：長いのをつなげたらくぐるね。
G児：いいね！でも、こうしたらこっちが倒れるな。
F児：じゃあ、ここに（台を）置いてみよう。だめか…。

少し離れて見るE児

T　：何か困った？

E児：崩れちゃうんだって。
T　:どんなふうにしたかったの？
F児：真っすぐの道の下をくぐったらカーブするかなー？って思ってやったけど…。ここが崩れる。
T:そうかー、ここが崩れるんだね。E君、よく見てたね！
（Tが少し手伝って倒れないように支えを作る。）

F児:いいね！これで水を流してみよう！
E児が水を持って来て流す。
全員：やったー！！いいね！
F児:くぐる道だ！水も流れたね。

＊遊びの前に「大好き♡よつがねウォーク」で発見したことを学級で共有する時間を設ける。また、前回までの遊びをマップで確認しながら、自分のしたい遊びやめあてがもてるように声を掛ける。

前回の遊び後の話し合いの内容を示している。個々が今日の遊びを決めるために、顔写真を自分で貼る。

＊いつも子供たちが使っている道具以外（樋のジョイントや筒、台、ビールケースなど）のものを近くに用意しておく。

◇この日は、F児が自分から友達に「今日はどうする？」という言葉をかけた。これまでは、一人一人の遊び方は様々だったかもしれないが、「カーブさせたい」という気持ちが3人で同じになり、一緒にコースを作り始めた姿が印象的だった。

◇E児は、教師が用意していたジョイントを運び、樋につなげた。F・G児はジョイントからつながる新しいコースを考え始めた。E児はジョイントを使い、コースを作り始めてみたものの、途中でどうしたらよいのか分からず、“できないかもしれない”とすぐに諦めようとする姿があった。しかし、F児はカーブするコースを作りたい気持ちが強く、G児と共に一生懸命考えようとしていた。

＊子供たちが困っている様子を肯定的に捉えながら、子供たちなりの感じ方、考え方を大切にした遊びが実現できるように声を掛ける。

＊その子なりの思いを大切にしながらも、最後にはみんなでコースを完成させたという満足感につながるよう、声掛けの仕方を工夫したり、一人一人の思いや考えを同じ場で共有したりできるように支える。

◇F・G児が一生懸命にこのコースを成功させようとしている姿をE児は少し離れてじっと見つめていた。E児が“できないかもしれない”とすぐに諦めてしまったことを後悔していたとしたら、もう一度このコース作りに仲間入りしてほしいという思いで見守っていた。

◇教師が子供たちに声を掛けた時、いち早く答えたのはE児であったことに驚いた。友達が困っている様子を教師よりも傍で感じていたことに気付かされた。「E君、よく見てたね！」と声を掛けたが、E児の満足感につながったのかは分からなかった。

【考察】

○自分の思いを存分に表して遊ぶ中で、友達の思いや考えに気付いたり、友達同士でつながる心地よさを味わったりしてほしいと願っていた。E児の遊び方に刺激されたF・G児は自分なりの思いや考えを少しずつ出しはじめ、遊びを楽しむことができた。また、E児は彼らの遊びが成功した姿から、できないと思ったことにも挑戦し、諦めずに取り組むことの面白さを少しでも感じたのではないかと思う。そのためには、遊びを続けたり、遊び込んだりするための環境の構成や援助が必要であった。教師は、その子なりの遊びのイメージや、その子が楽しんでいることに着目し、直接体験を取り入れたり、必要なものを準備したりし、遊びが充実していくように支えることが大切であった。

○4歳児なりの思いの伝え合いには、自分なりの思いや考えを存分に出して遊ぶことに加え、友達の思いや考えに興味や関心をもち、友達を意識して遊ぶことができる姿を支えることが大切ではないかと考える。思いを伝えることは言葉だけではなく、動作や態度、ジェスチャーなど、様々な個々の表し方の中にあることが分かった。4歳児のこの時期、まだ言葉だけで相手に伝えることは難しく、遊びが継続しにくかったり、思いの相違からトラブルになったりすることがある。教師は、一人一人の思いや考えを尊重しながらも、同じ場で遊ぶ子供たち同士をつなぎ、遊びを広げていく役割を担うことが必要である。同じ場で遊びながらも、遊ぶ相手には意識を向けずに遊び込んでいる姿や、その子なりの思いの表し方を教師が理解し、言葉を使って伝え直したり、互いの考えを言葉で映し返したりしながら支えることが有効であった。

事例４ 年長ばら組（6月～7月上旬） 方法②

「“よつがねだいすきまち”の遊びから、幼児が思いを伝え合いながら遊びを進めていくための援助について」

幼児の実態

・園外保育や、親子活動「大好き♡四絡ウォーク」を通して、四絡の街に関心をもっている。園外保育の体験から、ばら組で「よつがねだいすきまち」の遊びが始まった。

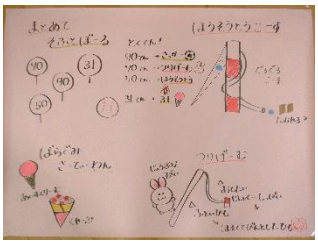
・幼児は、自分の思いを教師には進んで話している。しかし、遊びの中では、友達同士で言葉を伝え合いながら遊びを進めることはまだ難しい。そのため、自分の思うようにいかないと教師に助けを求めたり、同じ場で遊んでいても思いにズレが生じ、遊びが進みにくかったりすることがある。

教師の願い

・四絡の街で関心をもったことを、身近な素材を使って自分なりに表現することを楽しんでほしい。

・友達の姿を見たり、友達の思いを聞いたりして、イメージを広げて遊んだり、友達と一緒に遊びを進めていく楽しさを感じたりしてほしい。

	子供の姿	＊環境の構成と援助 ◇教師の思い、読み取り
6月2日	**ソフトボールをして遊ぼう** ○Ｉ児とＪ児は、ソフトボールとバットを作り、ピッチャーとバッターに分かれて遊び始める。Ｉ児は、更にバッターボックスを作り、本物らしく近づけようとする。Ｊ児は、ビデオカメラを作り、カメラマンになって友達の姿を撮ることも楽しんでいる。	＊自分たちのしたい遊びをじっくりと楽しめる場の広さを確保する。 ◇Ｉ児とＪ児は、同じ場で遊びながらいろいろな考えを思いついては楽しんでいる。二人だけでは試合ができないと教師は思ったが、すぐに答えを言うのではなく、自分たちで実際に遊びを進めていきながら、次第に困り感や人数の難しさを感じたり気づいたりして欲しいと、しばらく様子を見守ることにした。
6月5日	**2人だと遊びが進まない…** ○Ｉ児とＪ児は、自分たちで作ったものを場に整えながら、続きをしようとする。しかし、人数の少なさから遊びが思ったように進まない。 Ｊ児：試合がしたいんだけど、僕たちだけじゃできないんだよね。 Ｔ：試合をするには、人数が足りないのか。どうしたらいいかな。 Ｉ児：遊び方を変えるのはどう？ Ｔ：Ｉちゃんは、どんな考えがあるの？ Ｉ児：試合ができないから、的当てを作るっていうのはどう？ Ｔ：Ｊちゃんはどう思う？ Ｊ児：いいねぇ。的当ての遊びにしよう。 Ｉ児：「的当てソフトボール」にしよう！ 的に当てるの難しいけど、おもしろいね ○Ｉ児とＪ児は、新たな遊び方を考え、的当てを作り始める。	＊自分たちで新たな方法を考えられるよう、子供の話を聞きながら、思いを引き出す。 ◇Ｉ児・Ｊ児それぞれの考えがあるが、子供同士だけで思いを伝え合ったり、解決策を考えたりすることはまだ難しいようであった。教師が間に入りながら、互いの思いを引き出せれば、思いを伝え合いながら遊ぶ姿につながっていくのではないか。 ＊子供同士で思いの伝え合いができるよう、必要に応じて橋渡しをしながら支える。 ◇Ｉ児とＪ児は、互いにイメージを膨らませながらソフトボールの遊びを進めてきた。

6月21日	**よつがねのまちのルールを決めよう** ○I 児と J 児は、友達が遊びに来ると遊び方やボールの投げ方を友達に教えている。友達が来てくれるようになったことで、I 児は、的に当てた友達にはチケットを配っていた。 I 児：(自分の好きな) マリオのチケットにしよう。 J 児:(何も言わないが、その場で一緒に遊んでいる。) ○「ぐっどタイム」で、I 児はチケットを作ったことをみんなに発表したく、手を挙げる。 I 児：的を当てたら、このマリオのチケットをあげるよ。 T：I ちゃんは今日こんな考えを思いついたみたいなんだけど、どう？ K児：でも、四絡の街にはマリオの街はないよ。 I 児：(K児の言葉を聞いて、その場で少し考える。)じゃぁ、当たった的の点数で、みんなの遊び場に行けるっていうのはどう？ K児：いいねそれ！ T：Jちゃんはどう？ J 児：いい考えだね。じゃぁ、９０点に当たったら、サッカーのところに行けるってことにする？ T：友達が一緒に考えてくれたから、素敵なアイディアが思い浮かんだね。明日からがまた楽しみだね。 ○I 児は、それぞれの的の点数によって、「よつがねだいすきまち」のいろいろな遊び場に行けるように考えた。 ○的当てソフトボールの遊びのルールが決まり、友達もルールを守って遊ぼうとする。 年少さん･年中さんを「よつがねだいすきまち」に招待したよ！	◇的当ての遊びにしたことで、周りの友達も遊び方がイメージしやすく喜んで遊びに来るようになった。I 児は、テーマパークのようなイメージで友達にチケットを渡しているが、少しずつ「よつがねだいすきまち」のイメージから離れつつある。友達の思いを聞く良いチャンスであると考え、教師はすぐに I 児に問いかけるのではなく、「ぐっどタイム」で取り上げることにした。 ◇I 児は、自分で様々なイメージを広げて遊んでいたが、K児の言葉を聞いたことで、「よつがねだいすきまち」に沿った考えを思いつくことができた。 ＊学級全体でルールが共有できるよう、「ぐっどタイム」の中でのつぶやきをイラストにして分かりやすくする。  ◇新たなルールが生まれたことで、「よつがねだいすきまち」のそれぞれの遊び場に繋がりが生まれた。また、ルールができたことで、友達にとっても良い刺激となり、遊び方やルールを考える姿に繋がっていった。

【考察】

園外保育の経験から、「よつがねだいすきまち」の遊びが始まった。子供たちの遊びの中での「よつがねのまち」のイメージは、一人一人様々であったため、どこまでを共有するのか、難しさを感じる場面も多かった。I 児は、園外保育で見たソフトボールを遊びに取り入れていたが、遊んでいくうちに、イメージが「よつがねのまち」から離れていくこともあった。しかし、共に「よつがねだいすきまち」を作る仲間が周りにいたことや、友達の考えを聞いたことで、改めてイメージの共有ができたのではないかと考える。子供一人一人の考えは違うからこそ、言葉に表し、相手に伝えることで、自分の気持ちに折り合いをつけたり、新たな考えを思いついたりし、遊びがよりおもしろく変化していく。今回の事例から、改めて思いの伝え合いの重要性を感じた。その基盤には、友達の遊びを自分のこととして捉え発言するK児の存在、K児の意見を肯定的に受け止めるJ児の姿など、互いを認め合い、何でも言い合える仲間関係が大切だと感じた。また、子供の思いの伝え合いを、写真やイラストを使って表すことで、クラス全体でのイメージの共有がしやすかったと感じる。教師は、日々の遊びの中での子供の心の動きやきっかけに常にアンテナを張り、友達や学級全体に繋げていく援助の工夫が今後も必要である。

事例５　全園児（４月下旬～６月上旬）　　方法③

「家庭や地域と連携した大好き♡よつがねウォーク（親子ウォークラリー）の活動について」

〇本活動の意図

これまで、本園では園外保育で地域にある新内藤川や出雲ドーム、放送塔などへ積極的に出掛け、そこでの発見や気付き、体験を保育に取り入れてきた。地域と関わる機会が乏しく、転居者の多い家庭の実態から、これまで子供たちが散策してきた四絡地区を親子で散策し、クイズやミッションを取り入れたウォークラリーを行うことで、地域のことを知ったり、自分たちが住んでいる街をより好きになったりしてほしいと考えた。また、子供たちの地域での発見や気付きをどのようにして保育につなげているか、実際に園外保育を体験することで、保護者の幼稚園教育への理解を深めることができると考えた。

	〇活動の流れ	＊環境の構成と援助 ◇教師の思い、願い
４月下旬	〇ウォークラリーのポイントやクイズとなるような、おすすめの場所や四絡地区の豆知識、知りたいことを全保護者にアンケートを取る。	◇保護者から場所を提案してもらうことで、園が知らない新しいスポットを知ることができるのではないか。また、地域に関心をもつきっかけにしてほしい。
５月中旬	〇行事を運営する保護者ボランティアを愛育会（PTA）役員、理事を中心に募集する。 〇給食の時間等を利用して学級毎に下見を行う。	◇保護者ボランティアをすることで、園が主導ではなく、保護者も一緒に行事を進めることができると考える。
5月３１日、6月１日	〇「大好き♡よつがねウォーク」開催。四絡コミュニティセンター、出雲健康公園（出雲ドーム）、四絡小学校など地域と連携を図りながら、学年別に４～７カ所のポイントを設定し、親子でクイズやミッションを行う。ウォークラリーに合わせて、年中・少は親子で良いところ見つけを行う。年長は親子でウォークラリー後の感想を書く。 四絡コミュニティセンター 親子で街を散策 女子サッカーチームディオッサ出雲のユニフォームを借り、サッカーのミッションを行う。 出雲健康公園（出雲ドーム） 保護者が各ポイントを担当。クイズやミッションを出題。 四絡小学校校庭	＊地域の四絡コミュニティセンター、出雲健康公園（出雲ドーム）、四絡小学校などと連絡を取り、活動場所の確保や必要な物品の借用などを行う。また、コミュニティセンターのセンター長と打ち合わせを行い、保護者から出た知りたいことや、地域の歴史について教えていただく機会を設ける。 ◇親子での触れ合いの時間となってほしい。また、地域のことを知ったり、自分たちが住んでいる街をより好きになったりしてほしい。親子で一緒に歩くことで、子供がどんなことに興味をもっているか、保護者の気付きにつながると期待する。 ＊親子で一緒に考えたり、楽しんだりできるようなカードを作成する。また、地域の地図を載せ、終了後も思い出したり、親子で訪ねたりすることができるようにする。

6月上旬	○保護者からの感想や、事前の保護者アンケートへの返答、ウォークラリー当日の様子など記載し、人権教育 PTA 活動だより「つながり」を発行。	◇当日の振り返りすることで、この行事で大切にしていることを共通理解することができるのではないか。また、保護者の方からいただいたアンケートの疑問にも答えることで、より地域のことに関心をもっていただけるのではないか。
6月中旬	○年長の感想を基に、年長児版大好き♡よつがねマップと、保護者アンケートを基にした保護者版マップを作成。 保護者版マップ	◇マップとして形に残すことで、振り返りを行うことができると考えた。 年長作成マップ

○保護者からの声

保護者ボランティア

・初めてのボランティアで緊張しましたが、普段関わる事のないお子さんと関わることができて、とても楽しかったです。またボランティアをさせていただく機会を楽しみにしています。

・子供たちが楽しそうにしていて、やりがいがありました。上の学年のしっかりした姿にとても驚きました。

・身近に遺跡があるなんて全く知らなかったので、新たな発見でした。普段は車で通る所を歩くことで、色々な発見をしたり、思い出の場所が増えたりして良い経験だと思いました。挨拶もとても上手でした。

参加保護者

・親子で与えられたミッションをクリアしたり、地域の人と触れ合ったりして、子供たちが目標を達成する喜びを感じたり、挨拶の大切さなどを学んだりしてくれてとても嬉しかったです。

・親子で触れ合いのもてる内容で、他の保護者の方やクラスの友達とも交流できる貴重な時間を過ごせました。

・道中で県立中央病院のヘリコプターを見て「ヘリコプターのお尻が見える」と子供がつぶやきました。こんな可愛い表現をするんだなと知り、嬉しく思いました。

・とても楽しかったようで子供が鼻歌を歌いながら歩いていました。幼稚園で先生や友達と通ったことのある道や放送塔の草花のことなどを自慢げに教えてくれました。

・初めて歩く道があって、新鮮な気持ちになれました。出雲ドームの近くの水路にザリガニがいるのを見つけると「本当だ！あそこにもいる」と嬉しそうでした。親子での会話が弾み、楽しかったです。

【考察】

・親子でウォークラリーを行うことで、地域のことを知ったり、親子で触れ合う時間をもったりすることができた。活動中、子供のつぶやきや発見に耳を傾ける保護者の姿や親子での会話を楽しむ姿など、温かな関わりが見られた。会話の中で、子供が興味関心をもっていることに保護者も心を寄せ、一緒に見たり、触れたりする姿が見られ、子供への理解にもつながったと考える。

・園が一方的に活動を提案するのではなく、保護者アンケートを取ることで、多角的な視点からアイディアを取り入れることができた。保護者も企画の段階から参加したことで、この行事に関心をもったり、親子で楽しみにしたりする様子が見られた。また、保護者ボランティアを募り、共に行事を運営したことで、保護者と連携しながら子供の育ちを支える活動となった。ボランティアに進んで参加する保護者は、幼稚園教育への理解があり、協力的であると感じた。今後、そのような保護者が増えるよう活動の工夫や、保護者への働きかけを行っていかなければならないと考える。

・コミュニティセンターや小学校、出雲健康公園など地域の機関に協力を依頼したことで、地域との関わりが生まれた。幼稚園側から積極的に地域との連携を図ることで、普段は保護者が関わることの少ない人や場所とのつながりを感じられる活動になったのではないかと思う。この活動を単発で終わらせず、今後も各機関との継続した取り組みにつなげていかなくてはならないと考える。

Ⅷ　研究の成果と今後の課題

仮説①の視点から

本園では、「つながるトーク」を通して、子供の心情や経験を読み取るための取り組みを行ってきた。取り組む中で、各学級の職員だけで話し合いを終わらせてしまうと、子供の心情の捉えや支え方に偏りが生じてしまうことが分かった。学級の職員で話し合ったことを、他の学年の職員と共有することで、子供の育ちが見えてきたり、自分たちだけでは気付けない支援の仕方にも気付いたりすることができた。話し合ったことをもとに援助の仕方を工夫することで、幼児が安心して自分の思いを表したり、自分の力を発揮したりする姿につながった。

しかし、行事や補助教諭の勤務時間等の関係で、定期的な「つながるトーク」の実施が難しい時期もあり、継続していくための取り組み方については課題が残った。そのため、「つながるトーク」をいつでも書き込めるように用意しておくなどの取り組み方も試すようにした。今後も様々な方法で職員の横のつながりと縦のつながりを密にし、子供理解を深めながら、一人一人に寄り添った援助や、個の育ち、集団の育ちを支えていく必要がある。子供を支える職員のあたたかい関わりは子供にも連鎖していくと考える。今後も子供を中心にした職員同士のつながりを引き続き、大切にしていきたい。

仮説②の視点から

事例２から、３歳児は、一人一人が安心して自分の思いを伝えたくなるような感動体験との出会いや遊びを通して「ひと、もの、こと」と関わる中で、自分から身近な環境に心を寄せて関わったり、教師や友達と生活する楽しさを感じたりする姿を捉えることができた。

また、自分の思いを受け止めてもらえる教師の存在や自分の思いを認め受け止めてもらえる喜びを味わう体験が大切であった。そこから生まれる教師との信頼感や安心感が基盤となり、相手に自分の思いを安心して表現する姿を育むことが、伝え合う姿につながると感じた。

４歳児では、自分なりの思いや考えを存分に出して遊ぶことに加え、友達の思いや考えに興味や関心をもち、友達を意識して遊ぶことができる姿を支えることが大切であった。

事例３では、友達との関わりの中で、友達の思いや考えに触れ、友達の遊びに取り組む姿勢に刺激を受け、自分ではできないと思ったことにも挑戦したり、諦めずに取り組むことの面白さを感じたりするといった姿があった。そのためには、遊びを続けたり、遊び込んだりするための環境の構成や援助の必要性を感じた。

また、３歳児、４歳児では、思いを伝えることには、言葉だけでなく、動作やジェスチャーなど、様々な表し方の中にあることが分かった。教師は、一人一人の表現の中にあるその子なりの思いや考えを理解し、尊重しながら、友達同士をつなぐ援助や互いの思いや考えを言葉で映し返しながら支えることが大切であった。伝え合いの場面を支えることで、上記下線のような３歳児、４歳児なりのたくましく生活する姿につながっていく過程を捉えることができたと考える。

５歳児にとっては、一人一人の考えは違うからこそ、自分の考えを言葉に表し、相手に伝えたり、相手の考えに気づき、受け入れたりするような伝え合いの場の設定が大切であった。

事例４では、友達の困り感を学級全体の話題として投げかけ、友達に困ったことを伝えたり、友達の思いや考えを聞き合ったりすることができるような場や機会を設け、友達とつなぐ援助を大事にした。このような話し合いを通して、自分とは異なる見方や考え方に触れながら新たな考えを思いついたり、遊びをより面白く変化させながら自分たちで遊びを創ったり、学級全体の遊びのルールを自分たちで決めたりする姿は、自ら考え行動する５歳児なりのたくましく生活する姿につながっていくのではないかと考える。その土台には、何でも言い合える学級や仲間作りが重要であることが改めて分かった。今後の活動の中で、自分や友達のよさや違いに気づき、いろいろな見方や感じ方、考え方を柔軟に受け止めたり、認め合ったりすることができるような力を育てていきたいと考える。

伝え合いの方法として、「ぐっどタイム」や「いいねタイム」などのネーミングで年齢に応じた話し合いについて探ってきた。まずは、一人一人の「見て聞いて」の思いを教師が丁寧に受け止めていくことの積み重ねが次第に友達の思いに興味をもつようになり、伝え合いの姿にもつながっていった。自分の思いが大切にされているという実感が自分の思いを安心して伝えるようになったと考える。また、言葉で伝え合う話し合いだけでなく、遊びのマップを用いて、遊びの中での気付きを書き込んだり、遊びの過程を写真や絵などで思いや考えを見える化したりするように工夫した。

今後も一人一人の思いを受け止め、支えながら、集団の中で素直に言い合える仲間関係作りを工夫すると共に、学級の友達と遊びや思いをつなぐ方法としての話し合いの在り方を工夫していきたい。

事例５では、地域や保護者を巻き込んだ「大好き♡よつがねウォーク」を通して、親子で心を動かすような共通体験をすることで、子供が興味関心をもっていることに保護者も心を寄せたり、家庭での思いの伝え合いを体験する機会となったりした。また、活動を通して、保護者が子供への理解を深めると共に、子供のために一緒に取り組もうとする保護者との協力体制を築くきっかけにつながったと考える。

今後も子供の育ちを共に確かめ、喜び合えるような関係作りや子供への理解、幼稚園教育への理解を深めてもらうための共通体験や連携の在り方について探っていきたい。